

サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤り (7)

二〇一五年七月二十八日付で、日本統一教会（現、家庭連合）元会長の江利川安榮氏が「退会届」を郵送してきました。そこには、文亨進様を中心とした米国のサンクチュアリ教会の下で、日本サンクチュアリ教会総会長兼協会長として出発するとありました。

サンクチュアリ教会は、真のお父様のみ言と伝統が真のお母様によって覆されていると主張し、お母様のなさることをことごとく否定しています。これらの主張は、お父様がお母様と共に立ててこられた勝利圏を否定するものであり、真の父母様を中心とする統一家の一体化を損ねるものです。以下、サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤りを指摘します。

なお、誌面の都合上、文字数の制限があるため、詳しくは「真の父母様宣言文サイト (http://trueparents.jp/)」の掲載文や映像をごらんください。（教会成長研究院）

注・本文中、真の父母様のみ言は「青色」で、サンクチュアリ教会側の主張は「茶色」で色分けしています。

【12】天一国の歌を変えたという批判について

文亨進様は、二〇一五年七月十九日の説教で「お母様の指導のもと、天一国の歌が変えられた」と述べて、真のお母様を批判しておられます。

この件について応答いたします。真のお父様は二〇〇六年六

月、聖歌三番（日本の聖歌四番）の「栄光の賜物」を天一国の歌に制定されました。ところが、残念なことに、韓国と日本ではこの聖歌のメロディーが異なっており、国際集会などで歌うとき、歌がそろわないという現象が起こりました。

歌の乱れは国歌の威厳を傷つけます。韓日一体は天一国にとって重要であり、真のお父様

は韓日一体を願われました。真のお母様はお父様のその願いを受け、母の国を愛され、韓日一体化をさらに強固にしておられます。

真のお父様はまた、天一国の歌の制定のとき、**国花（バラとユリ）、国鳥（鶴）、天一国旗**なども定められましたが、「基本元節」を機にそれらの内容を盛り込んだ新しい天一国の歌がつくられました。それは、人類が願う自由・平和・統一・幸福の恒久的価値を謳い、天地人真の父母様をたたえ、天一国ビジョンと願いが五大洋六大州、宇宙に満ちることを祈る内容です。

現在の天一国の歌は、韓日間における歌の乱れもなく、その歌詞も国歌として意識を高揚させるものであり、韓日一体化をさらに確かなものにしていきます。真のお父様が制定された天一国の内容の全てを盛り込んだ天一国の歌を具現化されるかたは、真のお母様以外にはおられません。

そして、当然のことながら、真のお父様が作詞された「栄光の賜物」「聖励の新歌」は永遠の聖歌として今後も歌い続けられるものであり、今も集会などで歌われています。

【13】「天基元年」を「天一国元年」に変えた

サンクチュアリ教会を支持するある人は、真のお父様が二〇一〇年に定められた「天基元年」の年号が、真のお母様によって「天基が、『天一国元年』に改められた。お父様の立てられた伝統がお母様によって覆されている」と批判しています。

この件について応答いたします。真のお父様は二〇一〇年に「天基元年」を宣布されました。そして二〇一三年の「基本元節」を機に、真のお母様は「天一国元年」を宣布されましたが、それはお父様の願いに基づくものであり、批判すべきことではあ

りません。お父様が進められた天の摂理は、常にお母様の勝利圏と共にあった事実を踏まえて、このことを理解しなければならぬと言えます。

かつて、真のお父様は一九七七年二月二十三日のご誕生日に「天紀元年」を発表されました。

その日は「地勝日（天地勝利の日）」でもあり、次のようにみ言を語られました。

「陰暦の一九七七年の一月六日は私と妻の誕生日であり、また歴史的新紀元の年（天紀元年）を発表した日として、全員でそれを祝いました。全宇宙も祝ってくれます。事実なのです。それは天宙的新紀元が始まるからです。きょう、妻は三十四歳を越えます。イエス様は、三十三歳以上行くことができませんので。イエス様は、三十四歳の誕生日を神と共に祝いたかったのです。しかし、十字架のゆえにできませんでした。今年、妻

は、三十四歳を越え、イエス様の三十三歳を越えていくことになりません。ですから、そういう意味でも、きょうは最も記念すべき日なのです」（『祝福家庭と理想天国（II）』五五七～五五八ページ）

真のお父様は一九九三年に「成約時代」を宣布され、「成約時代」として数えていかれましたが、その年の「父母の日」に次のように語られました。

「きょうは第三十四回父母の日です。三十三周年です。三十三は完成を意味します。それは、きょうの父母の日はイエス様の年齢だということです。イエス様は、三十三歳の時に家庭をなすはずでしたが、十字架上で亡くなり、その立場をなせませんでした」（『祝福』一九九三年夏季号、五五ページ）

そして、真のお父様はイース

トガーデンで特別なお祝いをされ、真のお母様に指輪を贈られました。そのお祝いについて次のように語られました。

「この前、イエス様の三十三回目の誕生日を祝いましたね。……それで先生は、イエス様を解放して、イエス様が家庭を持つって四十三歳（お母様の還暦の二〇〇三年）になるまでに、完全な世界的基盤をつくらなければならぬので、急いでいるのです」（『ファミリー』一九九三年九月号、三五ページ）

真のお父様は二〇〇一年一月十三日、清平で「神様王権即位式」を挙行され、「天一国時代」を宣布。「天一国」として数えていかれました。そして、「二〇〇一年一月十三日を中心として、天一国一年、二年、三年に、天一国開門祝福聖婚式（二度目の結婚式）をしました。祝福聖婚式をしたので、天一国家庭に

において、真の父母が王の位置に立つことができるのです。それで、天宙・天地父母が四位基台を備え得る位置に立つて天国に入っていくことにより、天国が開いて心情的な一体圏ができるのです」（『後天時代の生活信仰』五九ページ）と語られました。

二〇〇三年は真のお母様の還暦でもあります。そして、この二度目の結婚式は、アダムとエバが堕落せずに完成したなら行うはずの「神様の結婚式」であり、お父様は「婚姻申告」「出生申告」をされました。この二度目の結婚式によって、神様は文鮮明先生と韓鶴子夫人の姿をもって顕現されるようになったと語られました（『ファミリー』二〇〇三年五月号、二五～二七ページ）。お父様とお母様のおふたりは、**神様の実体**の立場に立っておられるのです。

真のお父様は二〇一〇年二月十四日、第四十三回「真の神の日」「神様王権即位式九周年」

に天暦を発表され、「天基」として数えていかれました。そして、「一九四五年から七年間の一九五二年に終わるはずでしたが、キリスト教とカイン・アベルの国、諸宗教が一つになって文総裁に反対し……歴史が延長したのです。二〇一三年一月十三日は、天一国の起源となる日です。……摂理がかかっているその日まで、その期間内に教育を完了し……すべてのことが終わるのです」(二〇一〇年二月十四日)と語られました。

以上、述べてきたように、真のお父様は真のお母様と共に「天紀」「成約時代」「天一国時代」「天基」を数えていかれましたが、「二〇一三年一月十三日は、天一国の起源となる日です」と語っておられたように、お母様が「基元節」をもって「天一国元年」を発表され、そこから「天一国」として数えていかれることは、お父様のみ言に基づいたものです。

【14】「聖書の中に、メシヤが亡くなった後で、女性が相続すると書かれたところはない」という批判について

サンクチュアリ教会を支持するある人は、「聖書の中に、メシヤが亡くなった後で、女性が相続することについて書かれているところはありませぬ」と述べ、真のお母様が、真のお父様の聖和後、祝福家庭をはじめ食口を指導することに対して批判します。

しかし、この主張は、聖書に對する「無知」が生み出した誤った考え方です。聖書には、イエス様が十字架で亡くなった後、霊的眞の母である「聖霊」が信徒たちを導いて指導していくことについて明確に記されており、しかも「聖霊によらなければ、だれも『イエスを主である』と言うことができない」(コリントI二・3)とあります。

イエス様は十字架で亡くなる前に、十字架と復活の後、聖霊(霊的眞の母)が信徒を導くことについて次のように語っておられました。「父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであらう。……助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであらう」(ヨハネ一四・16、26)と。

また、復活した後、イエス様は弟子たちに現れ、「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて……地のはてまで、わたし(イエス)の証人となるであらう」(使徒行伝一・8)と語っておられました。これらのイエス様の預言どおり、ペンテコステ以降は、聖霊がイエス様と共にあつてクリスチャンを導いていくようになりました。「原理」が教えているように、

霊的眞の母である「聖霊」を通じてこそ、クリスチャンは霊的に重生されます。前述したとおり、聖書には「聖霊によらなければ、だれも『イエスを主である』と言うことができない」とあり、さらに「聖霊により新たにされて、わたしたちは救われたのである」(テトス三・5)とも書かれています。

このように「重生」の役事は、眞の父だけで成されるのではなく、必ず眞の母を通じなければなりません。ゆえに、イエス様は、「人の子に対して言い逆らう者は、ゆるされるであらう。しかし、聖霊に対して言い逆らう者は、この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない」(マタイ一二・32)と警告しておられるのです。

イエス様は、地上での肉身生活において、実体の眞の母を復帰することができませんでした。それゆえ原罪を清算することができず、十字架と復活の後、霊

的な眞の母である聖霊と共に「霊的重生」の役事だけを行うようになりました。新約時代は、霊的救いのみで終わったのです。しかし、再臨主であられる眞のお父様は、実体の眞の母を復帰され、原罪を清算する道を開かれました。それゆえ成約時代、天一国時代を迎えることができず、たのびました。『原理講論』に、「イエス再臨以後の完成成約時代は、妻の時代、すなわち、雌牛の時代であることを知らなければならぬ。ゆえに、雌牛は、とりもなおさず、完成を象徴するものである」(三二一ページ)と説明されていますが、そこには示唆に富んだ意味深いものがあります。二千年のキリスト教の歴史は、イエス様と聖霊が導いたことを知らなければなりません。

亨進様は、「二〇一三年、基元節の祝福の時、このようなことが起こっていたとは、私たちも知りませんでした。祝福指輪の内側に、お母様の名前だけが刻まれているのです。お父様の名前が祝福指輪から消されてしまいました」と述べ、眞のお母様を批判しておられます。また、サンクチュアリ教会側の人たちも、「お母様のサインを入れたものは、『呪いを象徴』している。直ちに外し、刻印を消すまで身につけないように」と批判しています。

この件について応答いたしました。この批判は、事実関係を確認せずに行っている無責任な批判にすぎません。この指輪に刻まれた眞のお母様のサイン(写真参照)は、眞の父母様の「正式認可」をアピールするため指輪会社が入れたものです。指輪会社は次のようにコメントしています。

「二〇〇七年頃、眞の父母様に指輪のデザインを決めていた際に、お母様がこれがいいと決めてくださり、サインを下さいました。それ以降、そのデザインで指輪を製作してきましたが、二〇一三年、さらに安く指輪を販売する非公式会社と競争になり、正統性をアピールするために、頂いたサインを刻んだものです」

このように、眞のお母様の名前の刻印は、二〇〇七年頃に眞の父母様によって選んでいた

いた際に、お母様がサインしておられたその文字を、指輪会社がその正統性をアピールするために刻印したものです。眞のお父様の名前が消されたという事実はありません。したがって、「お父様の名前が祝福指輪から消されてしまいました」という批判は誤りです。

これは、あくまでも指輪会社が、この指輪は眞の父母様を選ばれたものであるというその正統性をアピールするために刻印したものです。この祝福指輪は、眞のお父様と眞のお母様のおふたりで決めてくださった貴重な価値のあるものであり、「呪いを象徴」している。直ちに外し、刻印を消すまで身につけないように」というのは、とんでもない批判です。このような誤った批判に惑わされてはなりません。



【15】「二〇一三年、基元節の祝福指輪には、お母様の名前だけが刻まれている」という批判について